



①スヴァンテ・ペーボ著、野中香方子訳「ネアンデルタール人は私たちと交配した」

(文芸春秋・1890円)

②マーティン・J・ブレイザー著、山本太郎訳「失われてゆく、我々の内なる細菌」(みすず書房・3456円)

③エリザベス・コルバート著、鍛原多恵子訳「6度目の大絶滅」(NHK出版・2592円)



①科学読み物として今年最大の収穫。約3万年前まで、地球上にはわれわれとは異なるヒトがいた。高度な知性と独自の文化を持っていたネアンデルタール人。彼らはあるとき姿を消した。おそらく滅ぼされてしまったのだ。われわれによって。

一方でわずかに交流があった。性的な意味で。すべてはDNAを調べることで判明した。化石に残る微量DNAを抽出し解読する。そこには私たち自身の好戦性と好色性の紛れもない証拠が刻ま

DNAで分かるヒトのこと

れている。著者はノーベル賞にも擬せられるこの分野のパイオニア。

②あなたの消化管には、全身の細胞数よりもずっと多い細菌がすんでいる。寄生しているのではない。あなたを守っているのだ。そして人類の健康を支えている。そのバランスが今、危機にひんしている。医療の進歩と抗生物質の乱用のせいだ。ピロリ菌は悪者ではない、と著者は言う。胃酸分泌を抑制することで食道がんの予防という利益をもたらす。それを無理やり除去するとどうなるか。人間と腸内細菌の動的な平衡を再考するための画期的な好著。

③進化の歴史をたどってみるとこれまで5回、気象変動や小惑星衝突などで生物界に大きな危機が訪れ、大絶滅が起きた。現在、6度目が起こりつつある。人間自身の手によって。絶滅には人間も含まれる。ピュリツァー賞受賞の問題作。